

じょうこうじ

掟光寺だより

令和4年
2月号

行事案内

●2月7日(月)

「お日待ち講」

13時30分から

※新型コロナウイルスの影響で変更があるかもしれませんが、ご了承ください。

仏教たとえ話 1

【無一物の安らぎ】

知足・無一物

昔、ある国王が突然、出家を志し、王位を棄てて山に入り、修行僧となっていました。

一国の王として政治をしていた時は、黄金で飾られた宮殿の中で生活をし、立派な衣服を身にまとい、美味しい食事にも飽きる日々であった。しかし、修行僧になつてしまうとそのくらしは一変してしまつた。

家といえ、ぼろぼろの茅葺きの家であり、下に敷く筵も粗末なものであった。しかし、王さまはこの暮らしを我が意を得たものとして、「これはおもしろい」と快活に笑っていた。



周囲の人は、王さまがこのような貧しい中でも愉快に暮らしているのを見て、不思議に思い、王さまにそのわけを尋ねてみた。

すると、王さまはにこやかな顔をして、

「私は、国王として万民の上に立っていた時は、あれやこれやの心配事に追い回されて一日も心の休まる時がなかった。隣の国がこの国へ攻めてこないか、藏にしまつてある私の宝物が盗まれたりしないか、あるいは臣下の者が謀反を企てたりしないかと、次から次に不

安になつて、一日として心からくつろぎ、のんびりできる日はなかったのだ。

しかし、今、このように出家の身となつてみると、盗まれる財宝もなく、侵略される領土もなく、私を殺害しようとする者もない。ば、誘惑しようとする者もない。

ここにおいて、私は人間の真の安らぎは、身の外にある財宝ではなく、私の心の中にあるものだといふことが分かつたのだ。しかもこの安らぎは人から奪われる心配もなければ、邪魔される恐れもない。まったく壊れることのない喜びである。だから、日々が面白くて仕方がないのだ」(旧雜譬喻經)

※人は物を持ってば持つほど、その物に使われ、わずらわされることが多い。

仏教たとえ話 2

【半分の煎餅】

知足・努力・忍耐

ある愚かな男が空腹のあまり、煎餅を食べ続けて、6枚を越え、7枚目の半分まで食べたところをやつと満腹になつた。

その時は、彼は「おれは何とバカな事をしたんだ。この煎餅を半分食べた時に満腹にすることができた。ということ、前に食べた6枚は、別に食べる必要がなかったのであり、最初にこの煎餅を半分食べておくべきだった」と思い、非常に悔しい思いをした。

世間の富は、それを得られない間は苦しいものであり、得れば得たでそれを守ろうとしてまた苦しむ、後に失うことになれば、やはり同じく苦しむことになる。つまり、初めも中も終わりのついに安楽は得られないのである。(百喻經第三)

※自分が6枚の煎餅を食べたことを忘れ、半分の煎餅だけで満腹になつてしまつたという「勘違い」をしている男の話。

1枚2枚とそれまで食べ続けた煎餅があるからこそ満腹が得られた。つまり、小さなことでも日々積み重ねていくことが大きな結果を生むのである。

つみかや、ね

